

検索結果の分類動作を取り入れたウェブ検索支援システムの構築

森 彩乃

インターネットにより世界中の情報にアクセスできるようになった現在、膨大な量の情報から自分が求める情報のみを探し出すことは簡単ではない。ウェブ検索においては、目的に合った情報を効率よく入手するために、検索キーワードを適切に修正する必要がある。しかしながら、多くの方は「検索キーワードの発想」の段階でつまづきを感じていることが分かっている。そこで本研究では、検索を効率化するために検索者のキーワード修正技術を向上することを目的とする。

本研究では、ウェブ検索における検索キーワードの適切な修正に必要である「検索結果の内容把握」と「検索キーワードと検索結果の比較」を検索者に促すウェブ検索支援システムを構築した。「検索結果の内容把握」がしやすくなるよう、検索者が検索結果を分類する機能を実装し、「検索キーワードと検索結果の比較」がしやすくなるよう、検索結果と検索キーワードを画面内で近い位置に配置した。

本システムの有用性を検証するため、筑波大学の学群生を対象とした利用者実験を行った。本研究で提案する分類機能を実装していない「システム A」と、分類機能を実装した「システム B」の 2 つを用意し、実験参加者 9 名を、システム A を使用する 4 名と、システム B を使用する 5 名に分けた。実験参加者には、大学のレポートを想定した 2 つの検索課題についてウェブ検索を行ってもらい、それぞれの検索過程についてインタビューを行った。検索時間は 1 課題につき 15 分、インタビュー時間は 5 分とした。また、実験の前後にアンケートを実施した。

実験の結果、検索者が分類動作を行うことで、ページの内容を閲覧する回数が有意に増加することが示された。また、事後アンケートの結果から、検索結果を選択する動作や一目で選択状況が分かるような画面デザインによって、検索結果や検索の過程の振り返りを促す可能性があることが分かった。以上のことから、本システムにより、「検索結果の内容把握」が促されたことが示された。一方で、画面デザインによって「検索結果と検索キーワードの比較」が促されたという効果は確認できなかった。

本研究では、ウェブ検索における検索キーワードの適切な修正に必要な 2 つの行動を促すウェブ検索支援システムを構築した。本システムを用いることで、適切な検索キーワードの修正に繋がる行動を促すことができた。今後の課題は、分類動作がウェブ検索に与える影響の詳細な調査と、システムの改善である。

(指導教員 松村敦)